

文化の諸様態／文化のための場所

「アルゴ現代美術館&文化センター」Tehran, Iran

設計=アーマドレザ・シュリッカーアーキテクチャー=ノース

参照 | 本誌pp.2-21

アルゴ・ファクトリーは、イラン・イスラム革命が起きた1979年以後、初めてテヘランに建てられた美術館である。旧ビール醸造所をコンバージョンする計画は、イラン現代史の画期となる政治的・経済的性質の出来事と、対イラニン制裁措置の影響に大きく左右された。美術館の開館も、アメリカとイランとの緊張が最大限に高まった時期と重なった。2015-16年の大統領選挙キャンペーン中からすでに、ドナルド・特朗普は「わが国の代表者らが一体何が起きているかを把握するまで、すべてのイスラム教徒のアメリカ入国を完全に禁止する」政策をとる意向を表明していた。大統領に選出された特朗普は、イラン、リビア、ソマリア、スー丹、シリア、イエメンの国民に対するアメリカ入国を禁止する「行政命令13780号」に署名した。一連の入国禁止措置は2021年に停止されたものの、1980年から続くイランに対する経済制裁は変わらず、2018年にトランプ政権がイランによるウラン濃縮計画破棄を理由に交渉(核合意)に応じない決定を下した結果、

さらに強化された。このような困難にもかかわらず、アルゴ・ファクトリーは2020年にイラン人芸術家ナズゴル・アンサリニアの作品展「The Room Becomes a Street」とともに開館し、今ではイランで最も活発な文化拠点のひとつになっている。

-

アルゴ・ファクトリーの紹介にあたり、『CASABELLA』の慣習に反して、完成作の写真ページに先立ち、アーマドレザ・シュリッカーアーキテクチャー=ノース(ASAノース)から本誌に提供されたプレゼンテーション用画像を掲載することとした。それらは、どのような状況下でこの仕事が進められたか、またその過程でどういった設計上の決断がなされたかを効果的に表現すると思われるからである。

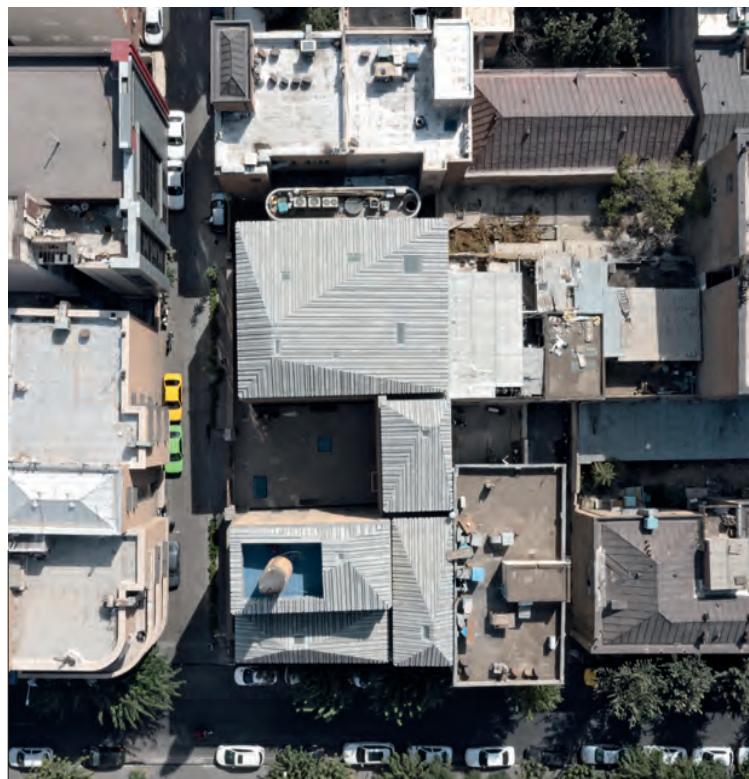
CASABELLA編集部

アルゴ・ファクトリーは、テヘラン中心部に1920年代に建てられた旧ビール醸造工場である。この建物はアート・センターとペジマン財團本部にコンバージョンされた。センターには6つの展示ギャラリー、図書室、アーティスト用レジデンス、イベント・スペース、小規模なスタジオ・アパートメント、ノンアルコール・ビールを販売するバー、アート・ショッ

ピ、展望デッキがある。コンバージョン計画により新たな構造的基礎が挿入され、他方で表現力のある剥き出しの耐力組積壁は保持された。5つのコンクリート製の勾配屋根は、近隣に見られる歴史的なヴァナキュラー建築のハラビー屋根のように造形され、古い工場の壁より50cm上に浮いている。これによりかつて風雨に晒されていた上層階を覆うように、温湿度が管理されたギャラリーの建築的「被り物(被覆)」が生まれた。新と旧を分けるこの裂け目から自然光が射しこみ、高さ8.5mの広々としたギャラリーを明るく照らす。かつての地下倉庫はサンクン・ギャラリーと、パフォーマンスおよびマルチメディア・アート専用の独立したブラック・ボックスとにコンバージョンされた。このミュージアムには2つのイベント・スペースが別個に設けられた。ひとつはロビーに隣接する収容力の高い催事会場で、映写や公開討論等の設備を備えている。もうひとつは親密な雰囲気の最上階の催事会場で、テヘランのパノラマが望めるほか、旧工場を特徴づける高い煙突を囲む展望デッキへの出入口がある。曲線を描く大階段——これも既存建築に挿入された浮遊するような要素——は、ロビーと上階のホワイト・ボックス・ギャラリーを結ぶ記念碑的な動線装置となった。70m²のカプセル・タワーがファクトリー南端の狭い空き地に新築され、現場打ちされた何層ものコンクリートで覆われた。ここにはアーティスト・イン・レジデンス用住居が置かれた。

アルゴ・ファクトリーのファサードには仕上材に旧工場の煉瓦が再利用された。ファサードのうち大規模な修復が必要だった部分にはモルタルが組み込まれ、その相當に深い奥行きにより歴史的な壁体への新たな挿入物を際立たせている。アルゴ・ファクトリーの新しい革新的な屋根構造は、近隣の12軒の歴史建造物の屋根の形態にインスピアされたものだが、構造的に既存建築より上に浮かべて新旧の差異を強調するために、また560m²の空調管理された閉じたギャラリー・スペースを創出するために変形された。構造的に最も複雑な特徴のひとつは、中心となるギャラリー階への新しい大階段である。それは現場打ちのコンクリート造で、全長12mにわたり中間支持材なしの設計とされた。剥き出しのコンクリート・スラブは140mmの厚さである。新たに注文生産されたエレベーターは、3層のパンチング・メタルを活用して、動くとモア効果を生み出す。

ASAノース



アルゴ現代美術館&文化センター:
上空より見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2022 Arnoldo Mondadori Editore
©2022 Architects Studio Japan

[基本データ]

アルゴ・ファクトリーは1921年に建設され、1931年にアルゴ・ブリュワリーに改称、1970年に閉鎖された。2016年にペジマン財團がこの醸造所を購入した。コンバージョンの設計競技が行われ、審査委員会はASA Northを選んだ。建設工事は2017年に始まり、2020年にアルゴ・ファクトリーはミュージアムおよび文化センターとして再オープンした。

[ASAノース]

2015年にアーマドレザ・シュリッカが設立したASAノースは、ニューヨークを拠点とする国際的建築設計事務所で、アーティスト、作家、アスリートらと協働している。www.asanorth.com

作品:アルゴ現代美術館&文化センター

設計:アーマドレザ・シュリッカ・アーキテクチャ=ノース

設計チーム:ASAノース——

Ahmadreza Schricker(主宰), Mehdi Holakoi(設計責任者),

Mona Jan-Ghorban(プロジェクトマネージャー),

Amin Mahdavi(特別顧問), Behrang Bani-Adam(構造)

協働者:第1期:Hobgood Architects: Patrick Hobgood(主宰),

Cam Fuller, David Ji, Chris Lacy, Alan Tin, Robert Macia(構造)

コンサルタント:Vandad Developments(施工),

Behrang Bani-Adam(構造),

Oana Stanescu(設計), Brutal Beton(コンクリート),

Ali Reza Mir-Taheri(機械・電機・配管), Aydin Afshar(電気設備),

The SEED Co. with Nooraform Eng Co.(照明),

Reza Zolfaghari(垂直動線), Sahra-Navard(防水),

Shah-Rokhi Group, Media Group(暖房・換気・空調),

Rashidi Group(鉄骨), Rasin-Sazeh(設備),

Arman-Sazeh and Absokoun(ガラス),

Sina Asghari-Baraad Painting Co.(塗装),

Ali Shahroudi Reflex Workshop and Frame Group(窓枠・仕切り)

建築主:Pejman Foundation(創設者・ハミドレザ・ペジマン)

規模:総面積 1,890m²

スケジュール:設計競技 2016年/設計委嘱 2017年/

着工 2018年/竣工 2019年/一般公開 2020年1月

所在地:No. 6, Behdasht St, Taghavi St, District 12, Tehran, Tehran Province, Iran

[テヘラン——アルゴの位置]

イラン暦1309年/西暦1930年

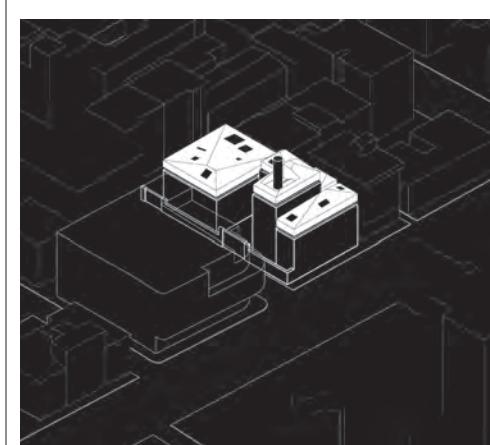
参照:本誌p.5



おそらくそこには……

[屋根]がある

参照:本誌pp.8-9



[応答]

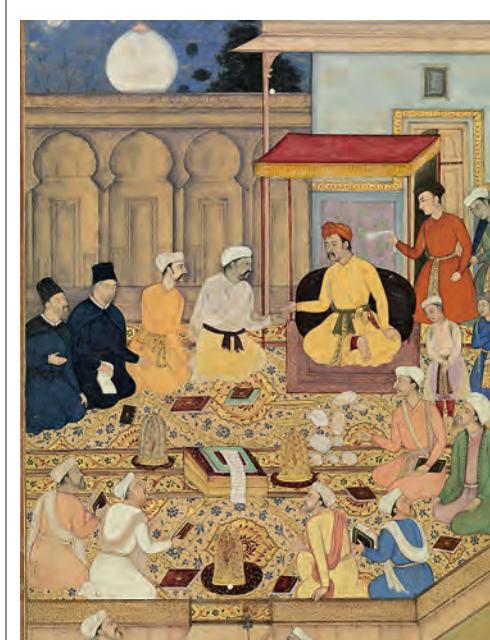
参照:本誌p.6



おそらくそこには……

[帽子]がある

参照:本誌p.10



[以前と以後]

参照:本誌p.7



[外部/内部]がある

モーリス的外部/パターン的内部

平滑な外部/粒子状の内部

参照:本誌p11



[組積のディテールを再建する]

参照:本誌p.13上

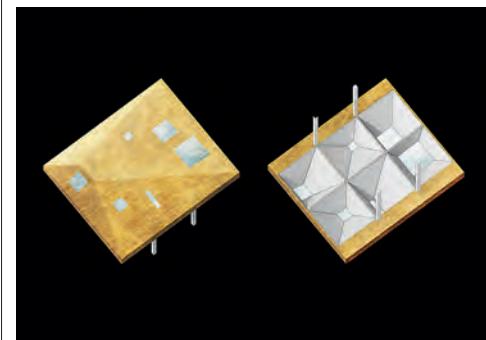
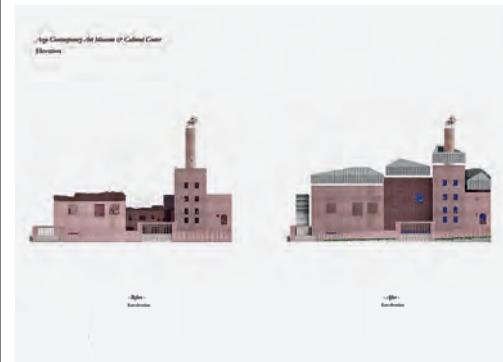


[ドローイング]

立面図:改修前/改修後 断面図:改修前/改修後

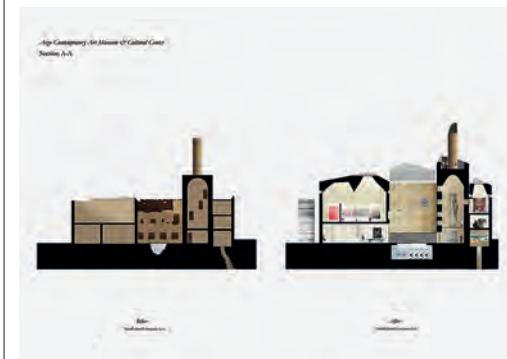
各階平面図:改修前/改修後

参照:本誌pp.14-15



[アーティスト・イン・レジデンスの新共同住居]

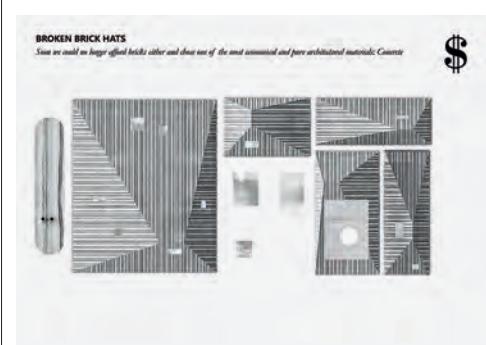
参照:本誌p.13下



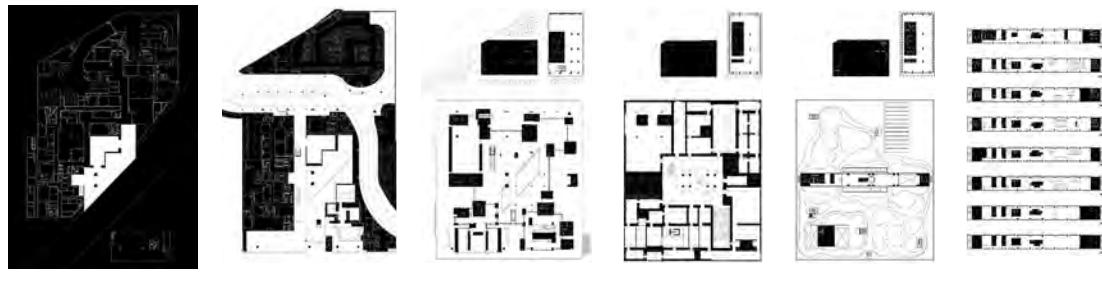
[対イラン経済制裁が予算を粉碎する]

真鍮 煉瓦 破碎煉瓦 コンクリート

参照:本誌p.12



補 遺



地下2階平面図

地下1階平面図

1階平面図

2階平面図

3階平面図

高層階平面図

大衆ツーリズムにつきものの諸儀礼を喚起する因子を自ら引き受けていた。たしかに、M+の施設は典型的な商業ビルと外形的に見分けがつかず、そこから派生する結果は、これを取り巻く超高層ビル群の風景に似せた環境適応である。トスカーナ地方で42種のフォーマットに分けて制作された、深緑色の琺瑯引き陶板タイルを用いた計算された外装仕上げによってのみ、カーテンウォールのクリシェを回避し、外被に重厚な素材感と類まれな色彩の深みを与えることに成功している。これに加えて、塩分を含んだ空気の腐食作用から建物を保護する利点が得られた。建築的な造形は、近くから見ると「触覚的」経験と一体化し、遠くから見ると電子的映像と融合する。これは、この新美術館に求められるのは何よりもその内容への注目であることを意味する。つまり、数々のコレクションの価値に、また中国が2020年に国家安全法を根拠に導入した検閲の制限を受けつつも、ヘルツォーク&ド・ムーロンが巧みに練り上げた洗練された装置により今後ここで生み出しが可能になる、企画のクオリティと多様性に狙いを定めているのである。

作品:M+ミュージアム | 設計:ヘルツォーク&ド・ムーロン

設計チーム:Jacques Herzog, Pierre de Meuron, Ascan Mergenthaler, Wim Walschap; Edman Choy, Stefan Goeddertz, Volker Jacob, Mai Komuro, Kwamina Monney,

Maximilian Beckenbauer, Alexander Berger

協働者:A. Abaigar Villota, R. Aebi, E. Agustoni, F. Ahmad, B. de Almeida Martins, J. Autran-Edorh, M. Ayalew-Duthaler, M. Bähr, T. Baldaque, M. Baurycza, F. Beaupère, F. Bojesen, V. Bourassa, C. Braga da Costa de Bragança, P. Bréchignac, A. Catellani, C. Chan, E. Chan, S. Cheng, M. Corradi, R. Coupland, M. Dessauvage, L. Dong, D. Dwars, D. Edwards, C. H. Estreban, B. García Gardelegui, P. Garrido, L. Gisler, P. Gonzalez, C. Hahn, C. Happel, A. Hernández Arteaga, S. Hörner, S. Hsu, S. Inoue, S. Jiménez Núñez, V. Kalisperakis, H. Seok Kang, E. Kaszuba, P. Kath, T. Kemper, M. Knüsel, R. Ko, D. Kok, D. Koo, L. C. Kwong, I. Labrador, J. Lau, V. Lefebvre, M. L. León Palacios, R. Leung, X. Li, J. Ljunggren, Á. Lőrincz, J. Lui, B. Luk, D. Mak, C. Thomas Mathieu, A. M. Caballero, J. Morrison, H. Ng, T. Noblin, D. Nüssen, M. Ors Romagosa, A. Paetz, M. Palocci, F. Pecegueiro Curado, S. Peev, E. Peláez, P. Peña Jurado, C. Polido, S. Riegas, A. Rodgers, E. Salgado Mordt, A. Sallam, G. Schwob, I. Smrk, J. Sotelo de Santiago, M. Stadler, K. Strehlke, R. Talebi, H. Tang, N. Tejerina, E. Thomas, R. Torres Martín, F. Valente-Gorjup, M. Vega Lopez, T. Walraven, F. Wong, H. Wu

エグゼクティブ・アーキテクト:TFP Farrells

構造・設備・ファサード:Arup, Hong Kong

コンサルタント:Arup, Hong Kong; Vogt Landscape Architects; iArt;

Prevart; Cartlidge Levene, Atelier Pacific;

Palagio Engineering; Langdon & Seah/ARCADIS; Atkins China

施工:Chun Wo Construction & Engineering Co;

Bachy Soletanche Group; Hsin Chong Construction Company;

Gammon Construction

建築主:西九龍文化地区管理局(WKCDA)

規模:敷地面積 25,000 m² / 延床面積 92,400 m²

スケジュール:設計競技 2012-13年 / 設計 2013-15年 /

施工 2014-21年

所在地:38 Museum Drive, Kowloon, Hong Kong, China

以下は、本号で特集した、文化活動に使う建物の設計を通して、建築家たちがさまざまな方向へと展開する機会をつかんだ事例を集めたページへの補遺である。それらと似た作品が既存の建造物を統合し、再利用計画を再解釈することはたびたびあるが、いずれの場合も綿密に組み立てられた計画から生まれる。また、建築家とその作品とを隔てる距離から生じる影響をコントロールできるような、入念に考えられた方法を使うことで実現されたさまざまな決定から生まれるものである。ここで読者に注意して欲しい差異は、以下のページに1軒の住宅の写真が何点か載るという事実からは分からぬ。この住宅も既存建築を起点にしてはいるものの、特集ページで扱った作品群とはまったく別の目的で建てられている。また、セルガスカーノの作品は、建築家と建造物との距離を道具を介在させずに物理的に無化することにより完成された仕事の成果、という考察ともまったく違う。

CASABELLA編集部

「ラ・ベラ・ハウス」 Cáceres, Spain

設計=セルガスカーノ

設計図のない言葉 フランチェスコ・ダルコ

参照 | 本誌pp.92-103

数年前に、セルガスカーノ建築設計事務所を主宰するホセ・セルガスヒルシア・カーノは、エストレマドゥーラ地方に1軒の農家を手に入れた。彼らが国際的な建築文化の注目と評価を浴びた、カルタヘナ国際会議場を完成して間もない頃であった。この作品について、本誌のマルコ・ビアージはメタクリート樹脂とポリカーボネートを使った多彩色の外被に言及し、「ブリコールのアプローチ」を採った成果と



左上に母屋(農家)、右下に別棟(馬小屋)を見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2022 Arnoldo Mondadori Editore

©2022 Architects Studio Japan



東ギャラリー

説明している(『CASABELLA』815/816号、2012)。外被の建設方法の研究は、セルガスカーノ事務所の仕事の特徴であり、それはケニアのトルカナに建てたワクチン接種・教育診療所[コノコノ種痘センター、2014]『CASABELLA』854号、2015]の、分解され湾曲したスラブで構成された屋根、あるいはエストレマドゥーラのプラセンシア国際会議場(2005-17)、ロンドンのサーベンタイン・ギャラリー・パヴィリオン(2015)が証明するとおりである。これらプラセンシアとロンドンの2作品は、流体力学の研究とよく似た、表層にかかる応力のパリエーションから造形されたように思われる。この方法により、ウォリューム群はシャボン玉やその連なりに似たもの、2つの境界に挟まれた最小エリアの表現と化すのであり、また被膜にETFE(エチレン=テトラフルオロエチレン共重合体のフィルムで、重量はガラスの約2%)のような非常に軽い「織物」を採用した理由も説明できる。これはすべて、セルガスカーノ事務所がインスタレーションと機能の決められた建物とを分ける、細い稜線の上で仕事をする姿勢の結果でもある。彼らは、建物の軽さが脆弱さ、不安定さ、そして特に一過性を表現するようになるまで、インスタレーションと建築物の特徴を相互に移し替える作業を突き詰める。こうした特徴は、セルガス

とカーノが古い農家を自邸に変える際に導入した修改築の特徴と同一視できるだろう。自邸を整備するため、彼らは既存のウォリュームに手を加え、屋根を高く持ち上げた。農家の建物を目隠しするのではなく、むしろファサードに縦横とも大きいガラス壁を挿入するという決断の効果を強調した。地元の建設会社や職人と協働する彼らは、設計案を見ず、スケッチを使わず、施工業者との対話を重視することによりあらゆる計画を実現してきた。そうした理由から、この住宅も彼らの「プリコラージュ」のアプローチと、与えられた諸条件に適応し、環境が与えるさまざまな機会を生かす彼らの才能の証拠として考察できるのである(ケニアの建物とサーベンタイン・ギャラリーのパヴィリオンはその好例である)。本作は一見して「共有された手作業」の結果であるが、実際のところ、セルガスとカーノが用途、慣習、建設方法の自発性に委ねた空間はじつに抑制的である。それは、各部屋を用途に合わせて改変する方法にも、石壁にレベルの異なる視覚的浸透性を導入するために、遊び心の限界まで検討を重ねた解決策にもよく表れている。屋外スペースの処理もひねりが効いている。屋外は、建物全体をおそらく最もよく特徴づける部分、すなわち母屋から離され、この

たび再利用された馬小屋を特徴づける完成と未完成の差異を軸に構成されている。馬小屋の地味な造形は改変されたが、セルガスとカーノがファサードに挿入した複数の開口部により、馬小屋の経験した機能的変身が際立っている。これらの開口部は防水扉としてデザインされた。スチールの壁を切り抜くのではなく、石壁に挿入された扉は、建築家たちが気に入りの色見本帳から選んだ鮮やかな色彩で塗装された。彼らは技術が指示するフォルムからウォキヤブラーを取り出している。これはセルガスカーノ事務所の建築的ウォキヤブラーではない。彼らが使うのは幾何学的な軽さ、先に触れたシャボン玉の表現であり、なんでもこなすよろず屋的な大工のウォキヤブラーと合体して、しばしばアイロニーに満ちたものになるのである。

作品:ラ・ベラ・ハウス

設計:セルガスカーノ——Lucía Cano, José Selgas

現場監理:Luismi Quintana | ディテール・木工:Ruben Criba

規模:延床面積 98m² / 有効面積 85m²

スケジュール:設計・施工 2016-21年

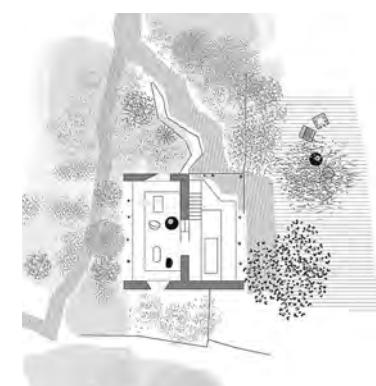
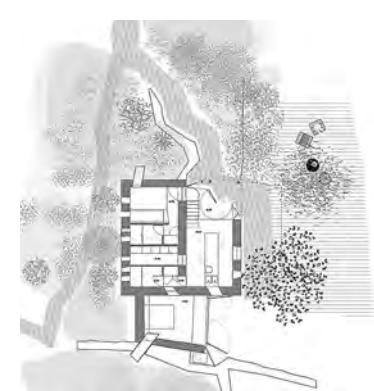
所在地:La Vera, Cáceres, Extremadura, Spain



農家を改築した母屋:エントランス廻り



馬小屋を改築した別棟



母屋:リビング・エリア



同:上階より見下ろす



同:ロフト



別棟:外壁と開口部を見る

母屋:平面図